

---

# 東方厨二伝

ひろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方厨二伝

### 【Nコード】

N0145Q

### 【作者名】

ひろ

### 【あらすじ】

かつこいい主人公が東方の世界で女の子といちゃいちゃするお話

## はじまり（前書き）

主人公がかっこいいです。なので、東方のキャラといちゃいちゃします。苦手な方はご注意ください。

## はじまり

ふと、意識が覚醒<sup>め</sup>めた。

「あら、起きたのね」

と、間を置かず、女の声。頭上から聴こえたそれは、柔らかくも、同時にどこか艶やかな色彩<sup>いろ</sup>を放っていた。

「眠っていたのか」

「ええ、それはもう、ぐっすり」と

そうか。頷き、くあ、と欠伸を一つ。黄よりはむしろ金に近い、女の髪が視界に。

「あらあら。随分とかわいらしいものね」

くすくすと笑いながら、女はオレの頭を撫でる。

女性特有の甘い匂いが嗅覚に触れる。それは決して不快なものではない。いつまでも身を委ねていたい、優しい感覚だ。

けれど。

「女」

「なにかしら」

「手をどけてくれるか」

「あら、お嫌だったかしら」

「そんなことはない——が、いつまでもこうしているわけにもいかない」

そう、オレは呪われた存在<sup>イキモノ</sup>。近づく者をすべからく不幸にする、そんな存在。

「そう。なら、仕方ないわね」

言って、女は少し残念そうにオレの頭から手をおろした。

ゆつくりと、オレは女の膝を後にする。

さて、ここはどこだろうか。オレは何をしていたのだろうか。今さらにして、そんな疑問。

そのあたり、目の前の女に訊ねるのが妥当か。

が、そんなオレの思考が追い付くより僅かに早く、女が口を開く。  
「貴方は——」女は少し言葉を探すようにして、「——とても、稀有な存在ね。とても、興味深い」

女の言葉に、くく、とオレは小さく笑う。

「止めておけ、女。無事には済まん」

「……なんのことかしら」

「——オレの頭を覗きたくば、それ相応の覚悟をしろと、言っている」

「っ!」

「どんな能力かは知らん。興味もない。が、果たしてお前は耐えられるかな? ——このオレの狂気に」

ニヤリと、笑った。

歩いていくその後ろ姿を見送りながら、女——八雲紫——は呟く。

……変な猫ね

## はじまり（後書き）

主人公、ゆかりんからこの場の情報を取得し忘れたまま歩み去るの  
図。

でもかっこいいためには仕方なかったのです

## それは運命の出会いなのか（前書き）

主人公はかつこいいので、今度は別のキャラといちゃいちゃします。

しょうがないよね。かつこいいから。

## それは運命の出会いなのか

女——そういえば名前を聞いていなかったが、これは仕方ないことだ。オレにはそんな資格などない。そう、不幸を運ぶオレには——と別れたオレは、まず人里を探すこととした。

もちろん、それは孤独<sup>ひとり</sup>を嫌ってではなく、純粹に情報を集めるため。ここは一体どこなのか。そしてオレはどうしてここにいるのか。脳裏に焼き付いた最後の光景は、紅い紅い燃えるような夕日。いつもの場所から、いつものように天空<sup>そら</sup>を見上げていた。

それが、知らぬ間に知らぬ女の膝の上。間の記憶は、無い。とうとうオレもヤキが回ったか。くく、とオレは小さく嘲笑<sup>わら</sup>う。

まあいい。ここがどこで、オレが何故ここにしよう、生き方自体は変わらない。

——誰とも馴れ合わず、故に誰も不幸にせず。

——孤独<sup>ひとり</sup>で生き、故に誰も幸せにできず。そんな在り方が、オレには似合いだ。産まれもってして狂気<sup>ヤミ</sup>を背負った、このオレなどには。

どれだけ歩いただろうか。目の前に広がるのは雑木林。

——人里を探していたはずが、何故。

このオレに限って、迷子、なんてはずはない。だとすれば、恐らく——

「引き寄せられた、か」

誰に言うでもなく、ぼつりと呟く。

それは人——ここに誰かがいるとも思えないが——に対してなのか、それとも場所に対してなのか。分からないが、オレの本能が、

オレをここへと連れてたに違いない。

ざくざくと、オレは目の前の林に入っていく。

仮にこの場に特別な何かがなかるうと、きっと今日の糧ぐらいは手に入れられるだろう。

考えた、その時だった。

視界に、不自然な暗闇を認める。それはまるで塊になって浮いているようで、少しずつこちらに近づいてくる。

不可思議な光景に気を取られる間に、その暗闇は、オレの目の前まで迫ってきて。

そして。

「貴方は食べてもいいにんげ……あれ？ 人間じゃない？」

そんなことを、のたまった。

「くく」

耐えきれず、笑う。

「うん？」

暗闇から現れたのは、小さなおなごだった。その髪の色は、先ほどの女を連想させる。

「そう長くは生きていないが、人と間違われた経験は、まだないな」

「ねこさん？」

「ああ、多分な」

「ねんねこにゃー？」

「何だ、それは」

「ねこさん、にゃーにゃー」

「いや、だから」

「にゃーにゃー」

「……」

「にゃー？」

「にゃ、にゃー」

「にゃーにゃー、にゃーにゃー」

満足そうに、おなごは笑うのだった。

それは運命の出会いなのか（後書き）

主人公、ようじょに弄ばれるの図。

二つのヤミが出会う時、物語は始まる。

こともない。

## それは運命との出会いなのか（前書き）

主人公は相変わらずかつこいいですが、残念ながらハーレム要員はまだ増えないようです。  
残念です。

## それは運命との出会いなのか

さて、とオレは意識を切り替え、改めて目の前のおなごを見やる。肩にかからない程度、おなごにしては短めと表現してよさそうな髪は淡い金色をしていて、赤いリボンがよく映える。白黒二色の服に、胸元には同じく赤のリボン。両の腕を水平に開いているのに何か理由はあるのだろうか。

オレを前にして先程の無邪気な会話、一見ただの人の子のようなが――否。

こやつは、『動く暗闇<sup>ヤミ</sup>の塊から』現れたのだ。

そんな存在が果たして真つ当な人間といえようか。「うん？」  
黙りこんだオレに、おなごは首を傾げる。

「おなご」

「……？」

「お主一体、何者だ」

鋭く、睨み付ける。嘘や誤魔化しは許さぬと。

「ルーミアは、ルーミアなのだー」

「……それで？」

「うん？」

「それだけでは済むまいよ。先程お主が纏っていた暗闇<sup>ヤミ</sup>、まさか知らぬとは言わせぬぞ」

更に眼光を鋭く。口を開いて牙を見せ。次に舐めたことを抜かしたその瞬間が、貴様の最期だと。

「あれはルーミアの能力だよ」

「ほう、能力と」

「『闇を操る程度の能力』それが、ルーミアの能力なのだ」

――瞬間、オレに走った驚愕を、ああ、何と表現すればよかったのだろう。

「狂気<sup>ヤミ</sup>を操る……だと……」

「そうだよ。闇を操る程度の能力」

「いとも簡単にそう言っただけのおなごに、オレは自分の身体が震え出すのを感じる。」

「操れるというのか……お主は……自身さえ押し潰してしまいそうな、その狂気を」

「うーん、押し潰すっていうのがよく分からないけど、今まで操れなかったことはないかな？」

「なんという……ことだ……。半ば諦めていた可能性が、今日の前に小さなおなごの形として。」

「オレは、すがつてもいいのだろうか。」

「救いを求めても、いいのだろうか。」

「だとしたら、ああ、それは――」

「ねこさん、どうしたのー？」

「なんでもない……なんでもないんだ……」

「そーなのかー」

——フェイト運命との出会い、なのかもしれない。

## それは運命との出会いなのか（後書き）

主人公、ちよつとした勘違いの図。

言葉って難しいですね。

『狂気』と『闇』とか皆さんも日常でよく間違える言葉でしょうか、主人公のかっこよさには変わりありませんが。

## クロ（前書き）

主人公はどうやらルーミアにご執心のようです。

でも間違いなくハーレムルートですのでご安心ください。

主人公はかつこいいので、例えば近くを歩くだけでも女性が自然と抱きついてきたりします。

すごいですね。

## クロ

「ねこさん、ねこさん」　ルーミアと名乗った目の前のおなご。  
高ぶった気持ちを何とか押さえつけて、オレは彼女に対する。

「なんだ？」

「お名前、教えて欲しいのだー」

「……漆黒の堕天使」

素直に答えたのは、何故だったのだろうか。

「遅刻の伊達氏？　ダメだよ。けーね先生怒る。頭突きばーん、て  
言いながら、痛みを思い出したのだろうか、その手は自身の額に。

「たわけ。遅刻ではなく、漆黒。伊達氏ではなく、堕天使だ」

「しっこく？　だてんし？」

「ああ」

うーん、と唸るルーミア。

「どうした」

「よくわからないから、クロでいい？」

「原初よりなお深き者……か。懐かしい呼び名だ」

そう最後に呼ばれたのはいつだっただろうか。思い出すことので  
きない、遠い日の記憶。

「いいだろう、そう呼ぶといい」

「うんっ」

嬉しそうに頷くルーミア。わはー、と意味の捉えられない言葉を  
口にしている。

それにしても、とオレは思う。

まさかこのオレが、ここまで素直に名前を交換するとは。

誰とも触れあわず、独り、生き逝くと決めた。その決意は、しか  
し、今も確かに胸の中にある。

ただ、そう、目の前にある存在、ルーミア。

彼女は、特別なかもしれない。

フェイト  
運命。

確信にも似た何か。

「ルーミア」

「うん？」

「オレはこの地に慣れん」

——だから、これは甘えなどではなく。

「しばらくの間、オレを導いてくれないか」

——克己という、野性的で、どこまでも挑戦的な感情。

「おなか減っちゃったから、今はむりかなー」  
「……」

## クロ（後書き）

主人公、会って間もないようじょにプロポーズするも敢えなく振られるの図。

今回、とうとう主人公の名前が明らかに。

かつこいいですね。紛れもなくかつこいいです

## 妖（あやかし）（前書き）

思った以上に主人公がデレてて作者は困惑しています。  
ルーミアが可愛いからダメなのか。いやダメなわけないか。

## 妖（あやかし）

幾らかのやり取りの結果、ルーミアの食事後にこの地の案内を頼むこととなった。

とはいえ、そもそも今から食料を探すつもりだったらしく、彼女の食欲が満たされるまでどれ程待たされるとも知れぬ。オレが食料探しを手伝うことでその無為な時間が多少なりとも短縮されるのなら、協力するが道理だろう。

「ルーミアよ」

「なーに？」

「お主は普段何を食しておるのだ？」

「うーん」

ルーミアは少し考えるようにして。

「……人肉？」

なんてことを、のたまった。

「は？」

さすがのオレもすぐには言葉が出なかった。ジンニク。漢字をあてれば、恐らくは「人肉」であろう。

「冗談……」

そうであれば話は早い。まんまと乗せられた己を嘲笑え<sup>わら</sup>ば済む。だが、

「……ではないのだな？」 「冗談？ なんぞ？」

おなごの瞳に、戯れや、ましてや偽りの色は皆無であった。ただ、素直に事実を述べたに違いなかった。「ルーミアよ」

「なーに？」

だとすれば、目の前のおなごは。オレが運命<sup>フェイト</sup>を思ったこの幼子は。

「お主——」

見た目通りの、人間ではなく、

「——妖<sup>あやかし</sup>の類か」

人間を害する、紛れもない化物なのだった。

「あやかしてなーに？」……またこのパターンか！ このオレがそう何度もやられると思うな！」

「うん？ 変なクロ……」 心底不思議そうに、小首を傾げるルーミア。

その様を見て確信する。彼女は、決して邪悪な存在ではない。確かにルーミアは人を食らうのだろう。人間を害する存在なのだろう。

けれど。

そこに悪意は、恐らく、無い。

実際にその場面を見たわけではないし、食われる立場からすれば、悪意の有無など関係なく彼女は「悪」であろう。

だからこれはオレの勝手な決めつけだ。そうあって欲しいという願望を、ルーミアに押しつける行為だ。

それで、いい。

それが、いい。

オレはオレだから。あやかただの漆黒の墮天使だから。

「いいか、ルーミア、妖あやかというのは――」

そして今は、ただのクロだから。

妖（あやかし）（後書き）

主人公、ようじょを前に何か一人で納得してるの図。

しかしその姿さえかつこいいので、ルーミアは「なでなでしてもいいかな？」とか考えてます。

主人公みたいなイケてる男ってホント羨ましいですね。

## 生（前書き）

最初の頃と比べてまるで別猫のような主人公。  
かっこいいだけでなく、ツンデレまでも併せ持ったチートな存在です。

## 生

結局、ルーミアの食料探しを手伝うことになった。

彼女は確かに人間の肉を好んで食らうものの、その他にも割と節操無く色々なものを糧としているらしい。

驚いたことに――今までも十分に驚きの連続だったが――ルーミアは人間と卓に並んで食事をしたことすらあるという。しかも相手がこの地に於ける妖怪の置き人だというのだから、ルーミアの能力からといい、もはやオレの常識は通用しないと見てよからう。

「ルーミアよ」

「なーに？」

「この先に川があるな」

左腕で前方を示しながら言う。

「うん。クロはこの辺詳しいの？」

「いや、初めて来る」

「え？ だって今、川があるって」

「匂いだ。水音もするな」

「うーん」

ルーミアは目を瞑ると、すすんと鼻を鳴らし、その後、耳に手をやった。

「わたしには分からないみたい」

「妖あやかしとはいえ、お主は人形ひとがた。猫のオレに劣るのは、まあ、仕方ないことか」

「そーなのかー」

日射しも大分弱まって来た。直に夕刻を迎えるだろう。

そういえば、と。

意識が覚醒めしてから何も腹に入れていなかったことに、今さらにして気づく。食料を必要としているのは、何もルーミアだけではなかったらしい。

「魚は好きか、ルーミアよ」

「お魚？ うーん、普段あんまり食べないからよく分かんない。霊夢のところで食べた時は、何か凄い焦げてたし」

霊夢、というのは例の仕置き人のことらしい。何でも、ハクレイの巫女とかいう凄い存在らしい。何がどう凄いのかは、強さという点以外、ルーミアの話からは分からなかったが。

「ふむ。それはいいかな。猫歴百数十年のオレが魚の旨い食い方と  
いうのを教えてやろう」

「わ、クロって結構長生き？」

「オレより長く生きた猫には終ぞ会わなかったな」

「そーなのかー」

どれだけ生きても、狂気は晴れることなく。人に不幸を運ぶ己を  
殺そうと思ったことも幾度とない。

それでも生きて、生きて。

そして辿り着いた、この地。

朧の先に見えた、救い。

「ルーミアよ」

「なーに？」

「腹が減ったな」

「ぺこぺこー」

「くく。では、急ぐとするか」

「了解なのだー」

オレが生きた意味を、なあ、ルーミアよ――

――お主が、教えてくれるのだろうか

## 生（後書き）

主人公、年齢を明かすの図。

少しずつ主人公の過去も明らかになっていきます。  
「重い過去」は、かつこいいの必須項目なのです。

## 遠い日（前書き）

主人公とルーミアのイチャイチャが止まらない件。  
まあ、止まらせる気もないのですが。

## 遠い日

川で魚を獲って食らい、しばらく横になる。背を丸め、くあ、と欠伸を一つ。

空気が紅<sup>あか</sup>みを帯びていた。

黄昏は美しく、そして、儚い。神妙であり、また、不気味でもある。

<sup>おつまがとき</sup>逢魔時との言葉通り、いよいよ魔が動き出す頃合。

なのだが。

その魔であるところのルーミアは、オレの隣に寝転がっていた。正確に言うと、ルーミアが寝転がったから、オレもそれに合わせて横になったのだ。

まあ、腹が満ちれば休みたくなるのは、人も魔も同じこと。もちろん、猫だって。

「ねー、クロ？」と、ルーミアは口を開いた。

「なんだ？」

「クロはさ、妖怪なの？」

「……何故そう思う？」

動揺は、上手く隠せていただろうか。

「だってほら、喋ってるし」

「喋る猫は珍しいか？」

「二匹<sup>ふたり</sup>ぐらい知ってるけど、どっちも妖怪だよ」

「……そうか」

ルーミアから、この地に妖<sup>あやかし</sup>の類が多く存在していることは聞き及んでいた。

だから、猫を由来とした妖がいたとしても、それは不思議ではないのだろう。

会ってみたい――

——とは、思わなかった。

「ルーミアよ」

「うん」

「オレは、お主の言う、妖怪ではない」

「そーなのか？」

「妖には、ならなかった。いや——」

思い浮かぶのは、遠い日の光景。ただ一人、主人と呼んだ人間の顔。

「——なれなかった、というのが正確なのかもしれないな」

言って、オレはくつくつと笑う。決して快い笑いではないが、自嘲とも違う。

何故なら、そこに後悔は無いのだから。

「クロ？」

「何でもない。少し昔を思い出したただけだ」

「面白いこと？」

「……そうだな。そうかもしれないな」

ルーミアは不思議そうな顔でオレを見ていた。

言葉通りではないことを察したか。勘がいいというよりは、単にオレが分かりやすいのかもしれない。

「なあ、ルーミアよ」

「なーに？」

「オレは、妖ではないよ」「うん」

「ただの、喋る猫だ」

ルーミアは、くすりと笑って。

「喋るねこさんは、ただのねこさんと違うよ」

「そうか。それもそうだな」

「——だからクロは、ただのクロだね」

その優しさに、オレは何と応えれば良かったのだろう。  
にゃー、と繕いに一つ鳴くオレの頭を、ルーミアが優しく撫でた。

## 遠い日（後書き）

主人公、ようじょにナデポされるの図。

主人公はかつこいいですが、あまりナデポをしません。むしろよくされます。

## 妖の歌（前書き）

主人公がそろそろルーミア以外にも食指を伸ばし始めるようです。

## 妖の歌

撫でられる心地好さに、いつの間にか寝入ってしまったらしい。目を開けると、辺りはすっかりと夜の様相を呈していた。

丸めた身体を一度伸ばそうとしたところで、地面がえらく暖かいことに気付く。

下を見やれば、そこには大の字になったルーミアの姿。

これはまた極上のベッドだ、と小さく笑う。

ベッドを揺らさぬよう、そつと降りる。改めて身体をぴんと伸ばし、一つ息を吐く。

さらさら、と川のせせらぎが耳に快い。水面に落ちた三日月がそれに合わせるようにゆらゆら揺れる。

風が吹く。ざあざあ、と木々の鳴き声が聞こえる。鳥の音、虫の音はどこか遠くに。

静かな夜だった。ルーミアの話を聞く限り、この林には彼女以外の妖もいるらしいが、今のところ騒ぎの様子は無い。

妖どもには悪いが、しばらくは獲物を見つけられずにいて欲しいと思う。

ルーミアが、眠っている。

むにやむにやと動く口元は、音にならない寝言の呟きなのか、それとも食事が足りなかったのか。

戯れに何かを口に入れてみたいと考えるも、適当なものが浮かばず。自分が人形ひとがたであれば、指でもくわえさせてみたところだが。

まあ今は静かに寝かせてやろう、と思う。

起きたら、約束通りこの地を案内してもらわねばならない。今いる林の中だけでも生きていくことは勿論可能だが、長く生きたオレに退屈は最大の敵であり。それでなくとも、周囲を知っておきたいというのは生物の本能であろう。

さて、ルーミアが起きるまでどうやって時間を潰そうか。

無駄に歩き回って今は静かな妖どもを刺激するのも本意でなく、  
いつそもう一度寝てしまうのが良いか。  
そう、考えた時だった。

——気づけば いつか ヤミの中——

歌が聴こえた。

激しい歌だった。騒がしい、と表現してもいいかもしれない。  
少なくともオレの好みではないし、この静かな夜に、ルーミアの  
眠りに相応しい歌だとは到底思えなかった。

歌い手は少しずつこちらに近づいているようで、音はどんどん大  
きくなる。

恐らくは妖によるものなのだろう。何かしらの力を感じる。試し  
に耳を塞いでみるも、歌の聴こえ方に変わりはない。

この林を拠点としているというルーミアならば何かしら知ってい  
るのであるが、わざわざ寝ているところを起こす程の変異か判断  
が付かない。一見ただの幼子のようにも、ルーミアとて妖が一。身  
の危険があるのならば、眠ったままではいけないだろう。

そうは思う。

——思うのだが、もしも。

この歌がルーミアにとって未知のものであったり、あるいは催眠  
の効果を持つものであったとするのならば。

考えた挙げ句、結局、オレはルーミアを起こすことにする。

「ルーミア、起きろ、ルーミアよ」

「……うーん……ねこさん？ あ、クロだー」

起き抜けのぼんやりとした口調で言う。

「ああ、クロだ」

「おはよークロー。って、あれ？ この歌」

「何か心当たりはあるか？」

やはり、知っていたようだ。ルーミアに慌てた様子は無く、どう

やら害意のあるものではないらしい。

「みすちーだよ」

出てきた単語は、意味の分からないものだったが。

「みすちー？」

「うん、みすちー。屋台とかやってるの。あっ」

「どうした？」

「お腹減ったかも」

無邪気にそう口にするルーミアに、ため息を一つ。  
振り回されてばかりの自分が、少し可笑しかった。

## 妖の歌（後書き）

主人公、眠るようじよを前に悶々とするの図。

普通なら軽く犯罪ですが、主人公はかっこいいので何の問題もありません。

「みすちー」

ルーミアが目覚めてしばらく、オレたちは特に会話を交わすこともなく、ただ静かに歌を聴いていた。

オレには騒がしいこの歌も、どうやらルーミアには違うらしい。足を伸ばして座ったルーミアは、たんたんたん、と爪先をばたつかせるようにしてリズムを取っている。太ももの上に抱えられたオレにはその振動がいたく心地よく、つい先程まで眠っていたいうのにまた意識に霞がかかる。

どれぐらいそうしていただろう。

いつの間にか、歌は聴こえなくなっていた。

夜想曲には随分と情緒が欠けたが、いざ耳に入らなくなると、言ノクターンい様の無い寂しさのようなものを感じた。

勝手なものだと小さく笑い、さてこれからどうしたものかと思考を改める。

ルーミアを見上げる。

「ん？」

小首を傾げるルーミア。これからどうするつもりかと尋ねようと  
するも、それは彼女に遮られた。

「あ、ちよつと待ってねクロ」

ルーミアはオレを右手に抱き抱えたまま立ち上がると、空いた左手を宙に向けて振った。

「おーい、みすちー」

「お、ルーミアじゃん。やつほ」

「みすちーやつほー」

ルーミアの声に招かれるように、歌声の主であるところの「みすちー」とやらがこちらに向かって降りてくる。

空に浮かぶ彼女の背中には鳥が持つような羽がある。しかし、それは体裁を整えるように小さく羽ばたくのみで、およそ人間大の彼

女を浮かせる程の効果があるとは考えにくい。ルーミアがそうであるように、恐らく何かしら妖あやしの力でもってして空を飛んでいるのだろつ。

「みすちー」が目の前に至るまで、オレはそんなことをやけに冷静に考えていた。

「あのね、みすちー、このねこさんはクロなんだよ。喋るんだよ」

「……いや、うん、言いたいことは分かるんだけどね」

嬉しそうに言うルーミアに、「みすちー」は何とも表現し難い微妙な笑いを浮かべる。

「みすちーは、これから屋台？」

「いいや、今日はお休みさね。たまには店のこととか関係無しに、ただ好きなように歌いたくてね」

「そうなのかー」ルーミアは小さく頷いた後、「残念。何かお腹減ってきたし、せっかくだからクロと一緒に八目鰻食べたかったな」

悲しそうに言うルーミアに、「みすちー」は呆れたように乾いた笑いを送る。

「あのね、ルーミア。世の中には対価というものがあってだね」

「たいか？」

「そう。誰かが何かをしてくれたなら、それに見合う報酬を。世の中慈善だけじゃ回らないわけさね。分かるかい？」

「うーん」

ルーミアは少し考えるようにして、それから、えへへと笑う。

「わかんない！」

「分かれ！　そして金を払え！」

「みすちー」は大分興奮しているらしく、鼻息荒くルーミアに掴みかかっている。前後に揺さぶられるルーミアは、おおお、と少し

楽しそうに揺れる声を出していた。

「いつも食うだけ食ってとっとと帰りくさりやがってからに！　じやーねーみすちーおいしかったよー、で済むか！」

「それわたしの真似？　あんまり似てないね」

「うがー！　このアホの子がー！」

「みすちー」は今まで以上に激しくルーミアを揺さぶる。が、それはルーミアを楽しませることにしかならず、そのことが更に彼女を激昂させるようだった。二人のさせるがままにしばらく。

ようやく、「みすちー」も静かになった。落ち着いたというよりは、単純に疲れたというのが正しいだろう。

さて。

「ルーミアよ」

「なーに？」

「そろそろ、そのレディを紹介して頂けるかな？」「れれれ、れでい！？　あ、あたしが！？」

動揺する「みすちー」が面白い。

「えーとね、みすちーはみすちーだよ。屋台とかやってるの」

「それはもう聞いた」

「だから、またあんたはそう……」

ため息が二つ重なって、オレと「みすちー」は顔を見合わせて笑った。

「みすちー」(後書き)

主人公、しょうじょがようじょにがばーっするのを間近で見ている図。

ハーレムルートが少しずつ見えてきたようなこないような

## ミスティア・ローレイ

「改めて自己紹介するよ。ミスティア・ローレイ。それがあたしの名前さね。そこのお馬鹿を含めて、みすちーと呼ばれることも多いかね」

「むー。馬鹿って言う方が馬鹿なんだよ」

「みすちー」改めミスティアは、はいはいと取り繕うと、言葉を続けた。

「あんたは、クロ、でいいのかい？」

「ああ。レイ、今のオレはそう呼ばれるのを望む」 からの意味を含め、にやりと笑ってみせる。

「だ、だから、レイなんてそんな大層な……」

困ったように笑うミスティアに対し、オレは言葉を続ける。

「……ローレイ。その歌声で人を死に誘う魔性」

西洋の伝説であったか。そのような話を耳にした覚えがある。

「レイ、あなたもそうなのかな？」

ミスティアを見詰め、問う。

「……そうさね。以前は無闇にそんなこともした」

「以前は、ということは今は違うのか？」

「屋台を始めてからはね。価値観が変わったのかな。今のあたしにや、人間だって大切なお客さん。精々、さ迷った人間をあたしの屋台に誘い込むぐらいのことさね」

そう言うミスティアの瞳に嘘や誤魔化しの色は無い。ただ、自分の屋台を大切に思う気持ちが伝わる。

「そうか。いきなり失礼なことを聞いた。謝罪するよ、レイ」

「そ、そのレイってのは止めてくれないかい。謝罪の件は最初から気にしないからさ」

「ありがとう」

気持ちのいい妖だと思った。まさかルーミアやミスティアのように

な者が一般的な妖だとは考えない。だが、妖の中に彼女たちのような存在があるということ、それを知れたのが、嬉しい。

「ミスティア。そう呼ばせて貰おう」

「構わないよ。よろしくさね、クロ」

言つて、ミスティアはその手を差し出す。

それは純粋な好意からの行動なのだろう。

だが。

だからこそ、オレにはその手を取ることが躊躇われた。

狂気ヤミを操るといふその能力故に、ルーミアとは行動を共にしているが、本来オレは孤独ひとりであるべき存在。

身に宿した狂気ヤミがいつ表に出るか分からぬ、危険な存在。

そんなオレが、果たして――

「すまないが、その『手』を取ることはできない」

「ああごめん、気に入らなかつたかい？」

謝らないでくれ。ミスティアは何も悪くない。

「違う。ただ、オレの狂気ヤミはきつとあなたを不幸にする」

だからどうか、オレに近づき過ぎないでくれ。オレのせいで傷つけないでくれ。

声にならない声が空気に溶けて、オレは語るべき言葉をなくした。

「クロ？」と、ルーミアの不思議そうな声。

それに返答をすることもできず、オレはただ俯くばかり。

「あのさ、クロさんよ」

ミスティアが口を開く。

「あんたにどんな事情があつて、その闇とやらがどんなもんかも、あたしにや分らない。出会ったばかりだ。当然さね」

だけど、ミスティアは続けた。

「あたしはあんたと仲良くなりたいと思うよ。事情を知らないあたしだけど敢えて言わせて貰う。闇がなんだっていうんだい。そのなの、あたしやそのルーミアにとっちゃひどく慣れ親しんだもんさね」

そうだろ、ルーミア。ミスティアが言う。  
うん、そだねー。ルーミアが軽く答える。

そんな二人を、オレはただ眩しく見上げることしかできない。

「闇を恐れてどうして夜雀が務まるかい。歌と闇の妖怪、ミスティア・ローレライを舐めるんじゃないよ」

——それは、何て強い言葉だったのだろう。

ヤミ  
「狂気に慣れ親しみ、そしてそれを恐れるものではないと言い切る  
その意思。おもい」

ああ、どうして。

どうして、この少女たちはこう強くあれるのか。

なあ、ルーミアよ。ミスティアよ。

いつか、オレもそんな風に——

「クロ」

優しい声と共に、ミスティアの手がもう一度差し出される。

「ああ」

今度は、躊躇うことなく、その手を取ることができた。

「よろしくさね、クロ」

「こちらこそ頼む、ミスティア」

「いいなー。クロが『お手』した」

「誰がするか！ お手じゃなくて友好の握手だ！ 水を差すなこの  
阿呆がつ！」

「えっ？」

「ちくしょうミステイア貴様も敵かつ！」

「い、いや、うん、握手だよ握手。いやだなールーミア、あはは」

「むー。クロ、わたしにもお手！」

「だから誰がするかっ！」

## ミステリア・ローレライ（後書き）

主人公、少女にSEKKYOされるの図。

SEKKYOもまたかっこいいの必須項目。しっかりと押さえておきました。

## 猫の見る夢

夢を見ていた。

ある黒猫が飼い主と何の変哲も無い一日を過ごしていた。

餌を貰い、飼い主の膝の上で昼寝を楽しみ、一緒に散歩をして、夜には彼女の枕元で、背を撫でられながら眠った。

そんな、穏やかで、幸せで。

——どこまでも悲しい夢だった。

「クロー、朝だよー、クローー」

一瞬、誰を呼んでいるのだろうという考えがちらついて、すぐに自分のことだと気付く。

今のオレは、「クロー」だった。

「ああ、起きた。起きたから朝からうるさくしないでくれ」

「むー。起こしてあげたのに、その言い方はなんなんだー」

「悪かった悪かった」

欠伸を一つ。寝起きはあまり芳しくない。

周囲に目をやる。

立ち上がって両手を広げるいつもの体勢。朝だー朝だーと意味のあるとは思えない言葉を口に出しているのは、ルーミア。早くから元

気なようで羨ましい。

未だ眠気は覚めないのだろう、座り込んで頭をふらふらさせるのは、ミスティア。お仲間だ。

全身をゆっくりと伸ばす。凝り固まった身体に早朝の冷えた空気が心地よい。

さあ、一日を始めようか。

「ルーミア、ミスティア」「なーに？」

「んー？」

「おはよう」

「うん！ おはよークロ！」

「んー、おはようさんさー」

前夜、幻想郷と呼ばれるこの地について簡単に説明をしてくれたのはミスティアだった。

今までオレがいた場所ではないことぐらい予想はついていたが、町や国の範疇を越えて「違う」場所だとは思っていなかった。

どうやら、今回のオレのように「神隠し」に会う例は零ではないらしい。

こちらの人里に定住する者や、運悪く妖の糧になる者もいれば、博麗神社（以前ルーミアの話に出てきたことを覚えている）に辿り着いて帰還する者もいるという。

「ならばまずはその神社だな」

ミスティアの話聞いて、オレはそう言ったのだった。

「え、クロ、帰っちゃうの……？」

その時見せた、ルーミアの悲しそうな顔が、目に焼き付いている。「帰らんよ」

なあ、だからルーミア。そんな顔をしないでくれ。

「オレの希望はこの地にある。ルーミア、お前が導いてくれるの  
らう?」

「うん! よくわかんないけど、がんばるよ」

まっすぐに向けられた笑顔が眩しくて、オレはそれとなく目を伏  
せる。

何が可笑しかったのか、ミステリアが小さく笑った。続けて、言  
う。

「神社に向かうのなら、さすがに朝を待とうかい。霊夢も一応人間  
だから、この時間は寝てるだろうさ」

「一応、とは?」

「闘ったことのある妖怪なら多分皆そう言っさ。ありゃ、バケモン  
さね」

「……化け物、か」

妖にさえそう呼ばれる人間。それは果たしてどれほどの狂気を抱  
えた存在なのだろう。

「うーん、つまり、とりあえず朝まで寝てればいいの?」

「ま、そういうこった。久々に思いつきり歌って、あたしもちよつ  
と疲れた。夜雀がこの時間に休むのも何だけど、ひとまず『夜寝』  
させてもらっよ」

ごろん、と横になるミステリア。

その隣にルーミアが続く。

オレも倣ってその場に身体を伏せようとして。

「クロはここ」

強制的に、二人の間へと運ばれたのだった。

「クロ、おやすみー」

「おやすみさね、クロ」

左右から手が伸びて、オレの背を優しく撫でる。  
目を瞑る。

今日は夢を見るのだろうか。  
ふと、そんなことを考えた。



## 猫の見る夢（後書き）

主人公、ようじよと少女に挟まれて撫でられながら眠るの図。  
しかし主人公は紳士（変態の意でなく）なので、当然過ちは起こりません。かつこいいい。

## 博麗霊夢

歩いて向かうには少し距離があるということで、ルーミアに抱えられての空の旅となった。

百年を越えて生きたが、宙に行く経験は初めてである。いつも見上げてきた空の中でいつも見上げてきた様々なものを見下ろすのは、どこか気持ちのよいところがあった。

「空を飛べるというのは、なかなか素晴らしいことだな」

「そーなのか？」

「あたしら妖怪にとつちや至極当たり前のことだからね。そんなことを考えもしなかったよ」

「そうか。少し勿体ない気もするな」

三人で特に取り留めのない話をしていると、博麗神社らしき建物が見えるまで大した時間を感じることはなかった。

こんな風に何でもない会話を楽しむのなんて、一体いつ以来のことだろうか。

神社へと降り立つルーミアの腕の中、オレはそんなことを考えていた。

境内には、竹箒を持った少女が一人いるのみだった。

腹と腋を見せるその服装は、かなり変則的だといえ紅白を基調とした巫女装束と見受けられる。ルーミアとミステリアから聞いた巫女、博麗霊夢と見て間違いなさそうだ。

彼女は、境内に降りたオレたちを認めると、先程からあまり動いていなかった竹箒をそのままずると引きずってこちらに歩いて来た。

「おはよーれーむ」

「おはようさん、朝からお疲れさんさね」

「はいはい、おはよう。それにしてもこんな時間から珍しいわね」

確かに、早朝に神社を訪れる妖怪ほど珍しいものもなかなか無いだろう。そして、それを受け入れる神社の存在も。

「あのね、霊夢に用があるんだけど、用があるのはわたしじゃなくてクロだね。クロはね、ねこさんだけど喋るんだよ。それで、外から来たんだけど、昨日わたしがお腹空いてたらお魚取ってくれて、前霊夢のところで食べた時は焦げててあんまり美味しくない」

「ミスティア、通訳」

「外来の喋る猫が、あんたに色々聞きたいんだってさ」

「なるほど」

「むー。二人ともひどいー」

剥れるルーミアの頭を、ミスティアがぽんぽんと宥めるように叩く。

オレはルーミアの腕の中からひょいと地面に飛び降りると、改めて巫女の少女を見上げて、言う。

「はじめまして、だな。本名は別にあるが、今はただクロと名乗っている。そう呼んで貰えると嬉しい」

「ふーん」霊夢は見定めるようにオレを見て、「そこらのより、よっぽどちゃんとしてそうね。博麗霊夢よ。博麗の方だと神社を指すことが多いから、霊夢って呼んで頂戴」

「了解した、霊夢。今日はよろしく頼む」

「ええ、くれぐれも私に面倒の無い範囲でよろしくね、クロ」

出会って早々にこんなことを口にする霊夢は、さっぱりとしていて、これはこれで気持ちのよい少女なのかもしれないと思った。

「れーむー、その前におなか減ったー」

「あんたに食わせるもんはうちに置いてないわ」

「えー。前一緒に食べたよー」

「あの時のことがあるから言ってるの！ 尽く食い散らかしてくれて！」

「霊夢も被害者だったのかい……」

「むー。ぺこぺこだーお腹ぺこぺこだー」

「霊夢よ」

「あん？ まさかクロ、あんたルーミアが可哀想とか言わないわよね？」

「いや、ここに来る前、供えにと思って魚を獲って来たのだが、思いの外大漁でな」

「クロつてとっても素敵よね！ 一目見た時からそう思ってたわ。うちの猫になる気ない？」

「光栄な話だが——」

「むー。クロはわたしと一緒にじゃなきゃダメー」

「—— 姫がこう仰せでな。申し訳ないが、お断りさせて頂こう」

「いつでも来ていいんだからね？ 今度はお肉とかだともっと嬉しいんだからね？」

「れーむ、クロ取ろうとしちゃダメだつてばー」

「はは。クロ、あんたつてば、とんだ色男だ」

四人での朝食は、神前だとは思えないほど、賑やかなものとなった。

## 博麗霊夢（後書き）

主人公、会ったばかりの少女にプロポーズされるの図。  
さあ、本格的にハーレム染みて来ましたね。いいことだ

## 巫女の問い

朝食を終え、霊夢の淹れたお茶を啜る。猫のオレには温いものを用意してくれた彼女の心配りに感謝。

「あー、朝からこんなに美味しいものをお腹いっぱい食べられるなんて、何て贅沢なのかしら」

卓袱台に突っ伏して、蕩けるように霊夢が言う。

そんな霊夢の様子を苦笑混じりに眺めるのはミステリア。

「向かう所敵無し、偉大なる博麗の巫女様も、兵糧攻めには勝てないってわけだ。……ま、調理した身としては、素直に喜ぶべきかね」

獲ってきた川魚を料理として卓に出したのはミステリアだった。

さすがは店持ちといったところか、オレとルーミアとでただ焼いただけの昨夜と違い、簡素ながらも数種に渡りしつかりと舌鼓を打たせるものを並べてきた。

「美味しいものは美味しい、お腹いっぱい食べれば幸せ。人間だろうと妖怪だろうと変わらないわ。猫だってそうでしょう？」

「そうだな。ミステリアの屋台とやらにも、一度行ってみたいところだ」

主に八目鰻を売りにしているらしい。そこそこに生きてきたが、今まで口にしたことはない。未知の食材に期待は膨らむ。

「歓迎するよ。もちろん、対価は頂くけどね」

「はいはい、わたしが連れてってあげるー」

「あんたは来んな」

「えー」

不満気なルーミアとは裏腹、ミステリアの言にくくくくと頷く霊夢が印象的だった。

「さて。食休みにはもう十分だろう」

霊夢が三杯目のお茶を淹れるのを待つて、オレはそう切り出した。  
「話を聞かせてもらっても良いか、霊夢よ」

「ええ、いいわよ」

両手に抱えた湯飲みを口元にやってから、彼女は続ける。

「とはいっても、その二人からある程度は聞いているんでしょう？」

「多少はな」

「そ。ルーミアはともかく、ミステリアが話したのなら、まあそんなに漏れはないでしょ」

「……さっきからルーミアもみすちーも、何かわたしにひどい気がする」

「ほらほら、口を挟むんじゃないさ」

「むー」

頬を膨らませるルーミア。ミステリアがそれをつつくと、ぷふつと可愛らしい音がしてルーミアの風船は萎んでしまった。

もー、というルーミアの声を合図に二人の追いかっこが始まる。  
霊夢はそちらに一度視線をやると小さくため息を吐いてから言った。

「じゃあ、クロの方から質問してもらおう形でいいかしら」

二度手間は御免だしね、と心底面倒そうに。

「こちらとしても都合だ。では、まず」

聞きたいことは、実はそう多くあるわけではない。

「オレのような『外来』の扱いを知りたい。こういった風に認識され、こういった振る舞いを受けるのか、教えて欲しい」

それはこの地で生きていくために必要な情報。ルーミアたち妖側だけの視点ではもちろん十分でなく、人間でありながら妖とも繋がりのある彼女に、そして今まで「外来」を実際に還してきた経験のある彼女にこそ、それを尋ねたかった。

「ふーん」と、霊夢は少し驚いたように言う。「こういう時、帰還の手段を聞かれるのが殆どなんだけど。クロは……」  
探るように。

「……還りたくないのかしら？ 貴方が生まれ、育った、貴方本来の世界に」

霊夢の瞳に鋭い色を認める。

嘘や誤魔化しの通じぬことを知る。

だから、オレは言う。

「……還りたい」

だってこの地に『彼女』はいない。

「でも——」

霊夢から視線を外す。

ミスティアを追いかけて境内を走り回るルーミアの姿が目に入る。

「——還らないのさ。少なくとも、まだ」

そう、決めたのだ。

## 巫女の問い（後書き）

主人公、問い詰める少女の前で別の女のことを考えるの図。  
気の多い男ですが、かっこいいので女性は許してくれるみたいです。  
さすが

## 白黒の魔女

霊夢への問答を終えてしばらく。特に何をするでなく、オレたちは各々好きなように時間を過ごしていた。

社の縁側に腰掛け、陽と風とを浴びながらお茶を啜る霊夢。

その膝に頭を預けてすやすやと寝息を立てるルーミアは、まるでただの幼子おさないのようにしか見えない。

ミスティアは何処からか取り出した紙と筆を前にうんうんと唸っている。聞いてみたところ、新しい歌を考えているらしい。

ゆったりと、空気が流れていく。

ルーミアが寝入ってからというもの、残った一人と一妖と一匹の間に会話は起こらない。しかしそれは決して苦痛ではなく。

何処か宙に浮いたような。

柵しがらみから解き放たれるような。

全てから許されるような。

そんな、ふわふわとした幸福感を、この空間に覚える。

あるいはそれが、博麗神社という領域なのか。

だとすると、本来友好関係にあるはずのない妖たちがこの場所を好んで訪れる気持ちも、少しは理解できる気がした。

どれ程の時間が経った頃か。穏やかな空気を破壊するように、そ

れは突然現れた。

「よう、霊夢。遊びに来てやったぜ」

白黒のエプロンドレスに、ルーミアよりも濃く鮮やかな金色の髪が映える少女だった。箒に乗って浮かぶその様は、自然、「魔女」という言葉を思い出させる。

「て、ルーミアと、奥にいるのはミステリアか。はは、今日もまた盛況だな、博麗神社は」

霊夢が大きくため息を吐く。

「呼んでやしないっていうのにね。あんたを含めて」

「ふふ、本当は嬉しいくせにな」

箒の柄で霊夢を軽くつつく。霊夢は鬱陶しそうにそれを払うと、言った。

「そうね。こいつらは食料を持って来てくれたから、確かに嬉しかったわね」

にや、と口元を歪めて。

「で、魔理沙、あんたは、どうやってこの私を喜ばせてくれるのかしら？」

それは、おおよそ、神に仕える巫女表情ではなかった。どちらかといえば抜かれる側に相応しいだろう禍<sup>まが</sup>った笑みだった。

とりあえず、とオレは奥の座敷、ミステリアの下に避難する。ミステリアは二人に構うことなく紙に文字を綴っている。その余裕に、少し安堵する。

「おうおう、ハクレイのミコ様ってーのは、斯くも自己本位で成り立つものなのか？」

少女は臆することなく言う。何処か楽しんでいるようにも見えた。「博麗の教えは自己犠牲を良しとせず。救われぬ者によって救いはもたせないのよ」

「……初めて聞いたぜ」

「今作ったわ」

自慢気に胸を張る霊夢。

対する少女は呆れたように目を伏せ、頭に被った大きな帽子を押さえると、やれやれだぜ、とやや大袈裟にため息を吐いた。

少しの硬直。ミスティアの筆だけが動く。

「うにゅ……」

と、霊夢の膝元から呻くような声が聞こえた。

「むー、ん？」 声の主は博麗の枕から起き上がると、意識が覚束無いのか、頭をふらふらとさせる。

「んー、まりさー？」

「おう。魔理沙だぜ。よし、ルーミア、お前もこの悪逆無道の巫女に何か言ってやれ」

「あくぎやくむどー？」

「とつても悪い奴ってことだぜ」

「霊夢、膝枕してくれたよ？」

ルーミアのそんな一言に。

「む」と、何も言えなくなる少女。

「い、いや、それは」と、先程までの態度はどうしたのか、小さくなる霊夢。

「ま、邪気の無いルーミアの勝ちってことさね」

筆を置き、紙を丸め、とんとんと自分の肩を叩きながらミスティアがそう纏めた。

## 白黒の魔女（後書き）

主人公、少女二人のプチ修羅場から逃げ出すの図。

かつこいい主人公が、同時に軽くヘタレなのは数々の案件が証明するところ。つまりそれが必要な要素なのです

## 霧雨魔理沙

「魔女のパートナーといえば黒猫。なあクロ、そうだろう？」

と、白黒の少女は言う。

「まあ、否定はせぬが」

迷信が現実<sup>まじ</sup>に力を持った旧時代から科学の発達した現代に至るまで、魔女の使い魔としてまず挙がるのは黒猫であろう。

「魔女と黒猫。誰もが認める仲じゃないか。お前がいて、私がいる。それだけで世界は完結する。他に何が必要だ？」

少女、霧雨魔理沙と名を交換してからこちら、彼女といえはずつとこの調子である。

「だから、クロ。お前は私のペットになるべきだぜ」

「それに対する返答は既に行ったはずだ。光栄な話だが、断らせて頂くと」

「それに対する返答も既に行ったんだぜ。断る、と」

「……霊夢」

助けを求めてこの場の主に視線を送る。

「諦めなさい。そいつに目をつけられた己が不幸を恨むのね」

こんな時頼りになるはずのルーミアは、ミスティアに連れて行かれて今ここにはいない。

どうしたものか、と小さくため息を吐く。

霧雨魔理沙というこの少女、決して性根の醜い人間ではないのだろう。出会ってからまだほんの僅かではあるものの、それぐらいは分かった。

ただ、何というか、少女然とした容姿とは裏腹、その振る舞いは益荒男を感じさせるものであり。そんな彼女を好ましくは思うものの、その熱を向けられる対象としては厄介なことこの上ない。

彼女は退かない。立ち塞がる壁の悉くを力尽くで破壊していくのだろう。

そう思わせる「何か」を、オレは彼女に感じていた。

「魔理沙よ」

「お、なんだい？」

「お主は退かぬ。そうであろう？」

「おう、よく分かつてるじゃないか」

嬉しそうに言う。

そんな彼女が、少し羨ましくて。

「ならば」

「ならば？」

だからオレは、彼女の壁となることを決めた。

「お主の意志と、オレの意志。より強い者を、決めることにしよう」

「ほう。喧嘩を売られたと思っていいんだな？」

にやり、と魔理沙は笑う。

「ちよ、ちよつと魔理沙、いくらなんでもそれは……」

傍観者に徹していた霊夢が、慌てて割り込んでくる。

しかし。

「構わんよ。互いに通したい意地があり、そしてここは幻想郷だ。

幸い、立会人もいる。大事にはならない」

「クロっ!？」

霊夢が驚きの声を挙げる。

当たり前の話だ。霊夢は知っている。オレが妖でないことを。

ただの、喋る猫であることを。

だが、だからこそ、止まらない時がある。

「いい度胸だ」と、魔理沙が言う。

「噂に聞く弾幕ごっこ」と、オレが言う。

「誰に喧嘩を吹っ掛けたのか、そして誰が主人に相応しいのか、分からせてやるぜ」

「オレのハジメテだ。有難く噛み締めて、そして知れ」

「――力尽くなつ！」  
「――力の意味を！」

## 霧雨魔理沙（後書き）

主人公、少女に喧嘩を吹っ掛けるの図。

主人公はかっこいいので、少女相手に喧嘩しても許されます。むしろそれがフラグになるのはそげぶの人が立証済みなのです

## 弾幕ごっこ

弾幕ごっこ。

この地、幻想郷での一般的な決闘方法。本来はスペルカードを競い合い、また破り合うものである。が、幻想郷を訪れたばかりのオレがそれを保持しているはずもなく、今回はカード枚数「ゼロ」での勝負とすることが、立会人、博麗霊夢の見守る中決定された。すなわち。

スペルカード撃破による勝敗決定の無い、より原始的な決闘である。

もはやそれは弾幕ごっことは呼べない「喧嘩」なのかもしれないが、霊夢にはオレの目指すところを伝えてあり、ならば今回だけと彼女は立会を引き受けてくれた。

「勝負はどちらかが戦闘不能となるか、負けを認めるまで。戦闘不能の判断や、何らかのトラブルが起きた際などは、私の決定に従うこと」

御幣（いわゆるお祓い棒）を左手に、周囲には陰陽玉。いつでも武力介入のできる体勢で、霊夢は言った。

「多少肩入れしてやってもいいんだぜ？」

と、魔理沙は言う。

「負けた時の言い訳か？」

と、オレは返す。

互いににらみ合い、霊夢の合図を待つ。

「3」

一秒、一秒を長く感じる。果たして今本当に空気は動いているのだろうか。そんなことを思う。

「2」

馬鹿なことを、とこの決闘を知った誰かは言うだろう。何せオレはスペルカードどころか、弾幕すら張れぬのだ。誰もが正気を疑う

であろう。

くく、と笑いが込み上げてくる。

「1」

それでいい。

それが、いい。

「――始め！」

さあ、魔理沙。

オレのこの虚構の狂気<sup>ヤミ</sup>、果たしてお前は受け止められるか？

開幕と同時に、簾に浮いた魔理沙から放たれる光の線。

その数、凡そ十といったところか。半分は手元から。残りは彼女より少し離れた後方からこちらに向かい来る。

見て避けるは叶わぬと、己の勘を信じて右へと転がる。

直後、地面の小さく揺れる感覚。

振り返り見れば、元いた場所には焦げ付いた穴がいくつか。当たればただでは済まない、予想のできていた事実、しかし、オレは笑う。

ああ、なんて、面白い。

そう思う。思わなければ、ならない。

「そらそら、休んでる暇は無いんだぜっ」

律儀にも宣言の上繰り出されたのは、今度は小さなミサイルのよ  
うな物体だった。

光線程の速さは無い。が、数が多く、軌道も様々である。  
これを全て避けるのは骨が折れそうだな、とため息が漏れそうに  
なるのを、意識して止める。

笑え。

笑え。

「くくつ。出し惜しみが過ぎるんじゃないかつ、なあ、魔理沙よつ」  
襲い来るミサイルの弾幕を必死にかわしながら、それを気取られ  
ぬよう、声を張り上げる。

「ははつ。逃げてばかりの猫がよく吠える。……そらつ、リクエス  
トにお応えだつ」

ミサイルのまだ尽きぬ中、新たに加わるのは星形の弾幕。  
到底避けきれるはずもなく、大小のかすり傷が次々と増えていく。  
魔理沙の攻撃は途切れなく、そして強力であった。それでもまだ  
直撃がないのは、持つて生まれた悪運の強さ故か。

しかしそれも、都合よく何時までも続くものではなく。

足を滑らせたわけでも、疲労に動きが鈍ったわけでもなかった。

——ただ、ある瞬間、それが当たり前のことのように、一筋の光  
が左後ろ足を貫いた。

一度当たればそれまでのこと。

ミサイルが、光が、星が、オレの身体に続けて直撃する。

痛みを伴う衝撃に飛びそうになる意識を、歯を食い縛って引き留  
める。

「よし、ピチュった！」

魔理沙の声が聞こえる。

だから、笑う。

「……く、くくっ」

「な、なんだよ。変なところ入ったか？」

痛む身体を無理矢理に立ち上がらせる。

そして、笑う。

「くくくっ。はは、はははっ」

「お、おい、霊夢。見ただろ、私の勝ちだ」

「くくっ、何を言っている？ 魔理沙よ」

「だから、私の勝ちだって……」

「確かに撃たれはした。だが、それだけだ」

「お前、何言つて……」

魔理沙の困惑が見て取れる。

それでいい。

「四肢が千切れたわけでも、臓物をぶちまけたわけでも、ましてや敗北を宣言したわけでもない。オレは負たのか、霊夢？」

「ルール上、まだ決着はついていないわ」

「おいおい、霊夢。誰が見たってクロはもう……」

「くくくっ。なあ、魔理沙よ」

「な、なんだよ」

笑う。

ワラう。

「痛いなあ。苦しいなあ。——楽しいなあ。なあ、魔理沙よ」

さあ、ここから。

「続きを。素晴らしきこの決闘（弾幕ごっこ）を。さあ、魔理沙よ」

「……ちつくしょう！ どうなっても知らないぜ！」

痛みには慣れている。

そういう生き方を、してきたから。

ただ、ここまでボロボロなのは、初めてかもしれない。

「なんだよ、なんなんだよっ！」

魔理沙がもう幾度目とも知れぬ弾幕を展開する。

それを避ける力は、もうとつくの昔に失われている。

だからこそ、笑った。

「ハ、ハハハはアハハハは」

弾が当たり、またオレは無様に転がされる。

「はぁ、はぁ。もういいだろ。立ち上がるなよ、クロ」

魔理沙の弱々しい声は、とても優勢な側のそれには聞こえない。

「く……くく。楽し……いな……弾幕……こ……というもの…

……は」

「こんなの、こんなのが弾幕ごつこなわけあるかつ！」

泣きそうな叫びをあげる魔理沙。

そんな少女にオレは笑い、痛みの麻痺すらしてきた身体を、再び、

戦場（遊び場）へと。

「ハハハハ。さあ、続けよう、魔理沙。楽しい、楽しい、弾幕ごつ

こ」

「……せめてクロ、お前も攻撃ぐらいして来いよ。なあ、こんな一

方的な……」

「必要ない」

「何だつて？」

「くく。くくくつ。必要ない、と言ったのだ。魔理沙。お主を相

手に、弾幕など必要ない、と」

そろそろ、頃合いだろう。

「ハハはハハハハ、猫の一匹仕留めることのできぬ若造が」

一步。ボロボロの身体を引きずるように、魔理沙の方へと。

「くくくつ。笑わせる。攻撃して来いだと」

一步。更に近づく。

魔理沙が一步、後退る。

「そんな必要があるのなら、最初の一手で勝負は決まっているぞ。くくつ、ハハハハ」

一步。踏み入る。

が、魔理沙との距離は更に遠くなる。

「アハハはハハハはハハハ」

一步。

笑う。

一步。

ワラう。

一步。

「う、うわあああああああ!!」

魔理沙が小さな八角形の何かを取り出すのが見える。

それは彼女の胸の前で構えられて。

「マ、マスタースパ……」

唱え終える前に、霊夢の御幣によって、振り落とされた。

「オレの……勝ちだな」

「ええ、クロ、あなたの勝ちよ」

霊夢の声を耳に、オレの意識は遠退いていった。

## 弾幕ごっこ（後書き）

主人公、少女相手にひたすら強がるの図。

つっぱることが男の勲章であることは、みなさんの知るところ。  
主人公はかつこいいので、つっぱり方もハンパねえです。

## ある妖怪が泣いた日のこと

最初に見えたのは、ルーミアの泣き顔だった。

「あ……起きた……ぐす……クロ、起きた……！」

「ああ、おはよう、ルーミア」

「うう……おはようじゃない。おはようじゃないよ！　ぐす……クロのばかーっ！」

幼くも整った顔を今はくしゃくしゃにして、オレを糾弾するのだった。

自分の行動に後悔は無いが、馬鹿なことをした自覚はある。目の前の少女が、一体誰のために涙を流しているのかも。

「すまん、ルーミア。要らぬ心配をかけた」

「ばかっ！　クロのばかっ！」

両の手に強く抱き締められたオレに、抵抗の余地はない。

「すまなかった」

「うう……」

「許してくれ、ルーミア」

泣き顔は、見たくない。

遠い記憶の向こうで思ったことを、今、再び思う。

「……もう、しない？」

「む」

「わたしの、見てないところで、倒れるようなこと。もう、しない？」

オレの瞳を覗き込むようにして、ルーミアは言った。

「……ルーミアの見ているところなら、いいのか？」　「それもダメっ！」

「おいおい」

「……でも、わたしの見てないところは、もっとダメ！」

抱きしめる力を痛いぐらいに強めて、言う。

ルーミアの強い感情が、瞳を通して流れ込んで来るようだった。

それは波のようで、光のようで、オレの身体をさらっていくのだっ  
た。

「分かった。約束しよう。ルーミアのいないところで、もうこんな  
無茶はしない」

「……ほんとに？」

「ああ」

「嘘ついたら針千本だよ？」

「まだ死にたくないからな。約束は守るさ」

ルーミアは片手でぐしぐしと涙を拭いて、笑った。

「うん。じゃあ、許してあげる」

ようやく顔を見せた向日葵に、オレの気もすつと晴れるように感  
じた。

「あー、なんていうか」

機嫌の直ったルーミアがお腹すいたーお腹すいたーと霊夢の下に  
向かうと、それを見計らったように魔理沙が声をかけてきた。

「随分仲いいんだな、ルーミアと」

「どうだろうな。まだ出会って一日だが、そんな気がしないのは確  
かか」

運命だとは口にしなかった。そうしてしまえば、その言葉が、出  
会いが、薄っぺらいものになってしまふ気がした。

「あんな取り乱したルーミアは初めて見るぜ。まだ一日って、お前

何したんだ、クロ？」

「何もしていないさ。ただ、喋って、傍にいた」

「ふーん」

信じられない、とその瞳は言う。

が、オレとしてもそれ以上語るべき事柄は見つけられない。

「ま、いいさ」と、魔理沙は案外あっさりと引いた。「それよりも、だ」

彼女は頭上の大きな黒帽子に手をやり、それを深く被り直すと、続けた。

「勝負の上のことだ。お前の怪我に関して、すまなかった、とは言わない」

けれど、と魔理沙。

「私は、お前の決意の強さを侮った。少し脅せば簡単に私の言う通りになると、気づかない内にクロを侮辱していた」

「そうか」

「だから、私はそのことを謝りたいと思う。すまなかった、クロ。

お前は、強い奴だ」

真摯な気持ちで、伝わってきた。

自分勝手に、前のめり気味な少女ではあるが、決して周りの見えない人間ではないのだろう。

「気にはしていない、が、謝罪は受け取っておこう」

「へへっ。ありがとな、クロ。それから」

鼻の頭をぽりぽりと搔いて、魔理沙は少し恥ずかしそうに。

「改めてよろしくな、クロ。——今度は、対等な、友人として」

そう言って差し出された手を、オレはぼんと握ってやるのだった。

「あーっ、クロの『お手』！ 魔理沙ずるいつ！」  
「やかましいわっ！」

## ある妖怪が泣いた日のこと（後書き）

主人公、幼女を泣かした上、すぐに別の少女とのフラグ建築に励むの図。

次回、ある幼女妖怪の話。番外扱いで、少し毛色が変わります。

## 番外：ある妖怪の話 前編

ある妖怪の少女がいた。

その少女には、昔の記憶がなかった。

だけどそれを気にすることはなかった。自分は頭がそんなに良くないから、きっと忘れてしまったのだろう、と簡単に考えた。

記憶がなくても、日々の暮らしに困ることはなかった。自分の名前と、能力と、細々とした知識は最低限残っていたから、起きて、食べて、寝ることは十分に可能だった。それだけしかやることがない、ということでもあった。

初め、少女の世界はひどく限定されたものであった。自分と、食糧。ただそれだけが、彼女の全てだった。

そんな日々は、でも、そう長く続かなかった。

少女の世界が少し広がったのは、自分以外の妖怪に初めて出会った時のことだ。それはミステリア・ローレイと名乗った。だから少女も名乗り返して、その時、少女は名前が互いを識別するためのもののだと知った。

自分と、自分以外の妖怪と、食糧。

少し広くなった世界は、それまでの暮らしとは比べ物にならないぐらい、心踊るものだった。誰かと会話を交わすことに意味を覚えた。ああこれが楽しいということか、と少女は思った。

ある日、いつものように食事をしていると、とても強そうな妖怪が現れた。

怒られた。

何でも、食糧の中には食べてはいけないものがあるらしい。

少女は素直に、ごめんなさい、と謝った。自分が無知なことは分かっていたし、相手は少し胡散臭かったけれど力は確かだったから従うことに否やはなかった。食べられるものが減ることは、ちょっと悲しかったけれど。

少女の中にまた新たな区分ができた。自分と、自分以外の妖怪と、食糧と、食べてはいけない食糧。

けれど、それは少なくとも当時の彼女には然して大きな変化ではなかった。

それが意味を持つようになるのは、また暫く時間が経った、紅い霧に覆われた夏の日のこと。食糧、特に人間の中には、強かったり面白かったり、食べるには勿体なものがある、と学んだのだ。

そして。

また別の夏。

暑さの少し和らいだ頃。

妖怪の少女——ルーミアの生涯において、恐らく一番大きな変化が、一匹の黒猫によってもたらされるのだった。

その日、ルーミアは少し機嫌が良かった。何だか早くに目が覚めて、しかも寝起きがすっきりとしていたのだ。ただそれだけのことだが、普段寝起きの良くない彼女からすると、それはとても貴重な経験だった。

いつものように暗闇を身に纏い、ルーミアは木々の間をふわふわと浮かび行く。食糧を探してはいるのだけれど、どちらかというとそれは散歩に近いものだった。昼の間は食べてもいい人間がほとんどいない。

お腹すいたなー、とルーミアは思った。次に、誰かに会わないかなー、と考えた。ご飯を分けてくれたり、作ってくれる知り合いがいい。具体的には、みすちーとか、けーねとか、もこーとか、りぐーとか、アリスとか、みすちーとか、みすちーとか。

人里に近づいた方が、勿論、誰かと会いやすい。そのことをルーミアは知っているから、そちらへと向かう。必要以上に人里に近づき過ぎるな、とけーねに言われているけれど、お腹が減った今は必要な時だから仕方ない。はずだ。とルーミアは思う。人間を食べに行くわけじゃないし、きっと大丈夫だ。

闇の塊が林の中をゆらゆら進む光景は、一般的に非常に不可思議なものに違いない。しかし、ここ幻想郷においてのみ、それは既に不可思議ではあり得なかった。その程度には、ルーミアは幻想郷に知れ渡った存在である。

あの紅い霧の夏以降、ルーミアから見える幻想郷は何だか元気になった気がする。誰かに会うことが多くなったし、だから知り合いも増えた。ルーミアの能力は広く知られて、普通それは妖怪にとつて好ましいことではないのだろうけれど、そのことでルーミアが不安を覚えることはなかった。弾幕ごつが広まったお陰で、妖怪同士の命のやり取りはほぼなくなっていった。

風が吹いたのさ、とみすちーは言った。

みすちーがかっこつけてる、とルーミアは言った。

殴られた。

殴られはしたけれど、でもみすちーの言葉はルーミアにも何となく分かる気がした。

ルーミアは今の幻想郷が好きだ。知り合いがたくさんいて、しかもそれはまだ増えている。誰かが用意してくれたご飯は、自分で捕まえた食糧よりもずっと美味しいことを知った。

ごーはーんー、ごーはーんー、おいしいごーはーんー。

頭の中で歌いながら、ルーミアは人里の方へと向かう。基本、暗闇を纏った彼女は声を出さない。彼女の持つ「闇」というイメージの中には、「静寂」が含まれているからだ。

——それは、ルーミアの音にならない歌声が順調に三巡目を迎える頃のことだった。

ふと。

ルーミアは一つの気配に気づく。

妖怪ではない、と、思う。そんな力は感じない。

でも、何か言葉を発するのが聞こえたから、多分、知性を持った人間なのだろう。

ならば。

最初に、聞かなければいけないことがある。

暗闇を解く。

そうして、口を開いた。

「貴方は食べてもいいにんげ……」

後編  
へ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0145q/>

---

東方厨二伝

2011年3月12日01時10分発行